

I. 概論

【目的】

世界中で新型コロナウイルス、SARS-CoV-2によるパンデミックが起これ、2020年9月4日時点で感染者が約2600万人、死亡者が86万人に達した。我が国は、緊急事態宣言と自粛要請で、一時感染を抑制したものの、社会、経済活動の再開とともに、感染が再度拡大し、国内の感染者は累計約7万人になり、SARS-CoV-2との戦いは新たなステージに入った。しかし、米国ミネソタ大学感染症研究政策チームのマイケル・オスターホルム所長の談話のように、この戦いは、野球でいうと2回裏に差しかったところでしかない。今後2年から3年以上に及ぶ、長いSARS-CoV-2との共存と戦いが続くことになる。その事実を受け止め、私たちは、新型コロナウイルス SARS-CoV-2を正面から見つめ、正しく理解し、恐怖と不安にのまれることなく、今、すべきことに意識を集中し、常に数か月先を予測しながら、戦いを継続する必要がある。そのことによって、患者さんとご家族の命を守り、職員の誰一人として、感染者を出すことなく、SARS-CoV-2が予防接種や、診断、治療の医療技術で制御可能になるまでの期間を乗り切り、事業を継続し、患者さんの命をお守りする。同時に、職員の命と生活を守るために本手引きを策定する。(COVID19はSARS-CoV-2が起こす感染症)

【数か月先を予測する】

- ・我が国は、緊急事態宣言で、5月末に一時感染を抑制したものの、社会、経済活動の再開とともに、再度7月末から感染者が増加したが、収束してきている。実行再生産数も0.8程度になってきた。
- ・感染者の急増に比べ、重症者は少ない。夏のシーズンは重症化しにくいとの説もある。
- ・国は、現時点では社会、経済活動を抑制する方針にはない。それは、本当の重症者が急増する第2波が秋以降に来ると予測されているからであり、その際には緊急事態宣言を出さざるを得なくなる可能性も高く、それまで社会活動をできるだけ維持したいという思惑があるようだ。

【感染予防のための原則】

新型コロナウイルスはノロウイルスのように感染し、目、鼻、口から侵入する！！ 目、鼻、口を守る！
潜伏期間は約5日間（1日から14日）感冒症状（発熱、咳、喀痰、咽頭痛、鼻汁）などの症状が比較的長く、平均約7日間持続する。感染力はインフルエンザより少し強い程度。感染経路は飛沫感染、接触感染、一部でエアロゾル（くしゃみなどで発生）に加え、**排せつ物、吐物、唾液から感染** **つまり食事とトイレでうつる！！**

※症状が出現する2日前から感染し、症状の無い人は、唾液と排せつ物からうつる

感染対策は 手洗い、咳エチケット、換気と環境消毒 検温 加湿して喉を潤すこと。

3密（密集、密閉、密接）を避ける 換気が悪く、人が密集する場所、特に近い距離での生活様式を共有していない人との近距離での飲食を避ける。

お互いにマスクをし、30分以内の短時間であれば、たとえ感染者と近距離で接触しても、感染する確率は極めて低い。

感染予防のための距離は飛沫感染に関しては2m、互いにマスクをしていれば、2m以内でも飛沫感染のリスクは低い。くしゃみや咳を抑えないでした場合や、口腔内、鼻、気管からの吸引や、バイパップの実施、気管カニューレの交換ではエアロゾルが発生し、4m程度の距離でも感染の可能性がある。

II. スタッフの体調管理と生活指針

【スタッフの体調管理】

- ・朝出勤前に体温を測る 自分の体調を確認する
体温が 37.5 度以上 1 日でもあったら自宅待機
- ・出勤時には体温を測る 退勤時も体温を測る
- ・咳、咽頭痛、味覚異常、体のだるさ、嘔吐、下痢、体温が 37 度以上が 2 日続くなどの症状があったら
医師（各院所の責任者）に相談して休むかどうか決める 医師に相談できない際には仕事を休む
- ・上記の体調不良が 4 日以上続くときには、医師（各院所の責任者）の診療を受ける
- ・家族に、37.5 度以上の発熱の人がいる場合や体調不良の人がいる場合で自分の体調が問題ない場合には、
管理職の医師に相談する。できるだけ症状のある家族に PCR 検査か抗原検査を受けてもらう
- ・発熱、体調不良があって自宅待機になった者は、原則として、抗原検査もしくは、PCR 検査陰性確認
及び医師（各院所の責任者）の許可によって出勤可能とする
- ・定期的な唾液の PCR 検査を全職員希望者に実施することを検討する その場合、PCR 検査陰性の有効期間は 1 週間と考える 陽性者は、自宅待機、保健所に連絡する
- ・抗原検査を法人内で十分用意しておく
- ・IgG IgM 抗体検査を各院所で実施できるようにする 常に各 5~10 セット用意する IgG IgM 抗体の陽性化は症状出現から IgG 11.6 日 IgM 12.5 日 実施は責任者医師の協議と判断による

【感染予防の行動 勤務時間内】

- ・現時点で、通勤の電車やバスで感染が広がったと考え得るエビデンスは無い。東京は、ロンドンやニューヨークより通勤電車が混雑していることで有名。多くの感染症専門家が、東京がロンドンやニューヨークより状況が悪化すると予測した根拠の一つが満員電車。しかし、そうならなかったのは、満員電車での感染は東京ではほとんど無かったことによると考えるしかない。東京の特徴は、ほとんどの利用者がマスクをしていたこと。従って、通勤の電車やバスなどでは、マスクをすること、マスクをしていない人の近くから離れる。また、つり革や手すりを触った手で、自分の顔を触らないこと、自分の顔を触る癖のある人は、手持ちの消毒液でこまめに手指消毒を行う。
- ・出勤時にオフィスに入る前に手を洗う 手洗いは最低 1 日 3 回 出勤時、食事の前、午後 3-4 時頃
- ・職場内に消毒薬を複数置いて頻繁に手指消毒を行う 玄関、休憩のテーブル、会議用のテーブルの上、往診準備のテーブルなど
- ・車のドアのノブ、入り口のドアノブ、トイレなどは 1 日 2 回以上次亜塩素酸ナトリウムで拭く
- ・各事業所の入り口に靴底拭きのための消毒マットを置く
- ・オフィスではマスクを常に着用し、人との距離をあける マスク着用で 0.5m マスク無しで 2m
- ・マスクの表面は触らない、マスクを触ったら手指消毒、マスクを置くときは必ずティッシュペーパーを敷いて置く その後ティッシュペーパーは捨てる
- ・共有のパソコンは使用後、手指消毒する 1 日 1 回キーボードやモニターをアルコール綿で拭く アルコール綿を共有パソコンの側に置いておく
- ・タブレットも表面をアルコールで毎日 1 回拭く 個人スマホも 1 日 1 回はアルコール綿で拭く

- ・ **オフィスで食事の際には、横並びで1m間隔をあけ対面にしない**、食事中は会話禁止。外食の際にも同じルールにする。
- ・ オフィスの換気 2時間毎 オフィスの環境消毒 トイレは各自が使用するたびに消毒 使用後は手を洗う
- ・ **往診中にコンビニや患者宅でトイレを借りる際には使用前後で消毒**
- ・ 原則として患者さんのお宅の訪問時と、退出時に手を洗う 手洗いが難しい場合手指消毒でも良い
- ・ 往診介助の事務は、患者家族とやり取りしたり、かばんから聴診器などを出す前に手を洗うか手指消毒する
- ・ 往診車は必ず常に窓を少しでも開けて換気をする
- ・ 退院調整会議、ケア担当者会議は原則として電話やテレビ電話を活用する。どうしてもやむを得ない場合は、病院に行くことも可とするが、この機会にテレビ電話での遠隔会議、遠隔面談を定着させるチャンスにする。
- ・ 厚労省の新型コロナウイルス接触確認アプリ COCOA を職場の携帯にインストールし、できるだけ職場の携帯を持ち歩く。このアプリが機能するためにBluetoothを必ずオンにする。このアプリは、新型コロナ PCR 陽性者と1m以内15分以上接触した場合、通知が来ることになっているが、まだ精度は低い。
- ・ COCOA は毎日チェックし、接触のお知らせがきたら必ず、事務長に報告し、事務長が所属の院所の院長に相談する。原則として勤務は継続。体調不良時にすみやかに抗原検査かPCRを行う。

【感染予防の行動 勤務時間外】

- ・ 自宅の換気 3時間おきを推奨 睡眠時は不要
 - ・ 勤務外でも外出の際にはマスクを着用する
 - ・ マスクは、1勤務日につき1枚支給が原則
 - ・ 法人から支給されたマスクは中性洗剤で洗浄して再利用して外出時や家族で使用するなど工夫する
 - ・ 家に帰ったら必ず手を洗う、うがいをする
 - ・ カラオケ、コンサート、ライブは原則として禁止 スポーツジム、屋外のスポーツ観戦（東京ドーム）可
 - ・ 外食の際には、他の客と2m距離をあけるか仕切りのある店にする
 - ・ 飲み会やパーティ等も人と人の間隔は2m 空け、個室などにし、本マニュアルが示す生活スタイルを守っている人で直近2週間以内に体調変化の無い人とは一緒にしてもよいが、大皿料理などは避ける
 - ・ 県をまたいでの旅行は国の方針に依る 旅行先でもこのマニュアルの生活様式は必ず守る
 - ・ 現時点では、保育園などは感染リスクが低いので、原則として子どもを預けて出勤する
- ※ご家族を守るため、この内容を同居の家族にも同様に徹底するようお願いしてください

Ⅲ. 新型コロナウイルス感染蔓延期におけるケア、診療の原則

【新型コロナウイルス感染疑い患者の診療と看護、ケア】

- ・ 医師、看護師、PA（往診介助事務）に N-95 マスク、ゴーグルまたはフェイスシールドを一人 1 個配布する N-95 マスクは自己管理で保存 サージカルマスクとの併用など使い方を工夫する N-95 マスクは月 1 枚の支給。ゴーグル、フェイスシールドの曇り止めも支給。仕事に支障をきたすようなら新しいものを支給。
- ・ 法人外からの見学、研修で往診に同行する者には、自分が使用する N-95 マスクを持参してもらう。N-95 マスクがない場合は、N-95 マスクを着用して対応すべき患者の往診には同行せず車内で待機してもらう。ゴーグル、ガウン、帽子、手袋は法人の物を供給する。このことについて、見学、研修の前あらかじめ案内しておく。
- ・ 各往診チームにガウン、帽子は 6 セットを用意する ゴーグルは 1 日 1 個使用、続けて使用する場合はアルコール綿で拭いて使用する
- ・ 以下のように感染防御の段階を決める
 - ① フルプリコーション（N-95 マスク（サージカルマスク併用）、ゴーグル、ガウン、帽子、手袋、（足カバー）
 - ② スタンダードプリコーション（サージカルマスク、ゴーグル、ガウン、帽子、手袋、（足カバー）
 - ③ 通常防御（サージカルマスクと原則としてゴーグルまたはフェイスシールド）洗濯可能な予防衣は、院内で洗濯、乾燥。洗濯係はフルプリコーション。

※接触した際の患者と家族の状況とスタッフの防護が、以下の基準を満たしていない場合は、濃厚接触者の可能性があるため、責任者の医師に報告し、該当スタッフの対応を決める。

- ・ 原則としてゴーグルなどのアイシールドは患者宅では常に装着する（サージカルマスクと同じ感覚で目、口、鼻を守る）（症状の無い高齢者の患者さんのお宅ではゴーグル、アイシールドはしなくても良い）
- ・ 朝、往診前に患者さんと同居の家族（往診に立ち会わなくても）の中に過去 4 日以内の有熱者がいないか確認して、過去 4 日以内の有熱者がいれば、以下の感染防御対策をして往診する **また家に入る少し前にも再度家族、本人の体調を確認すると同時に、可能な範囲で換気をお願いしておく**
- ・ **患者本人もしくは同居の家族が 4 日以内に 37.5 度以上の発熱があった場合、有熱者がその場に居合わせなくても、保菌している患者が咳や呼吸器などでエアロゾルで排菌している可能性があるため、フルプリコーション。**その際、荷物は患者宅に直接置かず、ビニール袋に包んで置く、パソコンや、聴診器、SpO2 モニター、カプノメーター、ペンライトなどは、使用後アルコール綿で拭く。アルコール綿はできるだけ節約して使用する。
- ・ 常に体温が 37.5 度以上、あるいは腫瘍熱、筋緊張による発熱など医師が明らかに感染ではないと判断できる発熱は、通常診療で良い
- ・ それ以外にも、医師の判断で患者の病状、状態により 感染防御を実施してよいが、ガウンなどは数に限りがあるので、十分に必要性を考慮して実施する
- ・ 感染疑いの患者が気管切開の場合に加え、バイパップや、シーパップ、NHF を使用している場合は特に、ウイルスの飛沫、拡散量が多いので、患者との距離を 2m 以上でも事務の介助者（PA）も含め必ずフルプリコーションにする。

- ・一度フルプリコーションを行い、患者の発熱などの症状が改善した後 4 日間以内に診療する際は、フルプリコーションを継続する。症状改善 4 日経過した後は、ガウン不要だが N-95 マスクとゴーグルは 10 日間使用する。ただし、PCR 検査または抗原検査を実施して陰性を確認できれば通常防御で良い。
- ・往診介助事務
 - 医師に準じて、感染防御を行う N-95 マスク、ゴーグルは医師同様に使用する N-95 マスクは名前を書いて専用とする。
 - また、医師の判断で、往診介助事務は玄関や、車内待機にすることも可能。玄関待機でも、気管切開、バイパップ、シーパップ、NHF 患者の場合は、N-95 マスクとゴーグルと手袋はつける。
- ・訪問看護師 訪問リハビリセラピスト 診療所看護師
 - 看護は、患者宅滞在時間が長く、気管吸引でエアロゾルが発生しやすく、排せつ物を扱うので、注意を要する。気管切開や、バイパップ、シーパップ、NHF などが無く、排せつ物の処理のみならスタンダードプリコーションで良いが、発熱のみでなく、くしゃみ、咳など気になる症状がある場合は、N-95 マスクを使用する。気管切開やバイパップ、シーパップ、NHF している患者が感冒症状があり、PCR 陰性が確認できていない場合は必ずフルプリコーション。
- ・診療、ケア後の処理
 - 使用したガウン、手袋、感染疑いの患者で使用したサージカルマスク、ガウン（レインコート）帽子は廃棄する、ビニール袋に入れて可能な限り患者宅で廃棄してもらう。
 - ※サージカルマスクは質が悪いもの、洗ったものを感染疑いの患者に使用するなど工夫する
- ・SARS-CoV-2 感染拡大期に、主介護者が体調不良になり、当院の患者の在宅療養が継続困難になる可能性がある場合は、電話再診で処方箋を出すことも可とする。 保健情報が無い場合は、電話で口頭で保険者番号などを聞き取りカルテを作成する

IV. 新型コロナウイルス感染者への対応

① 感染者と接触したときの対応 スタッフの感染者接触状況による対応規定

接触の状況	対応
保健所から濃厚接触者と指定されたスタッフ	14 日間の出勤停止、PCR 検査、症状出現時に再度 PCR 検査
発症者及び無症候性保菌者に対して気管内吸引や、気管カニューレ交換、バギングなどを N-95 マスク無しまたはアイシールド無しで実施したスタッフ	14 日間の出勤停止、PCR 検査、症状出現時に再度 PCR 検査
発症者がマスク未着用で、スタッフもマスク未着用で、2m 以内で 30 分以上接触した場合	14 日間の出勤停止、PCR 検査、症状出現時に再度 PCR 検査
発症者がマスク着用し、スタッフがマスク未着用で、2m 以内で 30 分以上接触した場合	14 日間の出勤停止、症状出現時に PCR 検査
発症者の分泌物や排せつ物と直接接触し、直後に手指消毒、手洗いを行わなかったスタッフ	14 日間の出勤停止、症状出現時に PCR 検査
発症者がマスク未着用で咳、痰が多く、スタッフがマスク着用し、2 m 以内で接触 30 分以上、目の防御をしていなかった、または直後に手指消毒、手洗いをしなかった	出勤可能だが、14 日間の健康観察、 患者診察、ケアの中止 、1 日 2 回の体温測定、症状出現時に PCR 検査
発症者がマスク装着もしくは咳、痰が無し（無症候性保菌者も含む）、スタッフがマスク着用、2 m 以内で接触 30 分以上、目の防御をしていなかった、または直後に手指消毒、手洗いをしなかった	出勤可能だが、14 日間の健康観察、 患者診察、ケアは可能 、1 日 2 回の体温測定、症状出現時に PCR 検査
発症者のマスク着用の有無を問わず、スタッフがマスク着用、目の防御なしで発症者と概ね 2m 以内で 30 分以内 接触した場合	出勤可能だが、14 日間の健康観察、 患者診察、ケアは可能 、1 日 2 回の体温測定、症状出現時に PCR 検査
発症者にスタッフがマスクとアイシールドをして 2m 以内で 30 分以内 接触した場合	特に対応不要
発症者がマスク装着もしくは咳、痰が無し（無症候性保菌者も含む）、スタッフがマスクとアイシールド着用、2 m 以内で接触 30 分以上 接触した場合	特に対応不要
発症者に当院の規定のスタンダードプリコーション（帽子、ガウン、サージカルマスク、アイシールド、手袋）をして 2m 以内 30 分以上 接触し、気管内吸引や、気管カニューレ交換、バギングをしなかった場合	特に対応不要
発症者及び無症候性保菌者に当院の規定のフルプリコーション（帽子、ガウン、N-95 マスク、アイシールド、手袋）をして 2m 以内 30 分以上 接触し、気管内吸引や、気管カニューレ交換、バギングを行った場合	特に対応不要

※発症者：PCR 検査陽性かつ呼吸器症状、37.5 度以上の発熱を認める者 潜伏期は含まない

※無症候性保菌者：PCR 検査陽性だが、発熱や呼吸器症状を認めない者

※症状の無い濃厚接触者は PCR 陰性を確認するまでは、無症候性保菌者と同等に扱う

参考 CDC Interim U.S. Guidance for Risk Assessment and Public Health Management of Healthcare Personnel with Potential Exposure in a Healthcare Setting to Patients with 2019 Novel Coronavirus (2019-nCoV)

② 患者本人あるいは家族が新型コロナウイルスを発症した場合、あるいは濃厚接触者とされた場合の対応について

・患者本人が PCR 陽性の場合

基本的には入院することが想定される。患者本人が退院しても、同居家族が保健所から自宅待機を指示されている期間はフルプリコーション。

入院せず自宅待機の場合で、同居家族がいない場合は、保健所から自宅待機を指示されている間は原則としてフルプリコーション、自宅待機が解除されたらフルプリコーションも解除。ただし、有症状なら症状が出現した日を day0 として day10 以降かつ症状軽快後 72 時間経過したらフルプリコーション解除、無症状なら PCR 検査を受けた日を day0 として day10 までフルプリコーション。

入院せず自宅待機の場合で、同居家族がいる場合は、家族への感染があり得るので本人の PCR 陽性になった検査の日を day0 として day24 までフルプリコーション。

・家族が PCR 陽性で患者本人が PCR 陰性の場合

家族が入院せず自宅待機の場合は、保健所から自宅待機を指示されている間は原則としてフルプリコーション、自宅待機が解除されたらフルプリコーションも解除。患者本人が有症状なら症状が出現した日を day0 として day10 以降かつ症状軽快後 72 時間経過したらフルプリコーション解除、無症状なら PCR 検査を受けた日を day0 として day14 までフルプリコーション。

・患者本人が家族以外の新型コロナウイルス発症者の濃厚接触者になった場合

患者本人の PCR 検査結果が出るまでの間、あるいは PCR 陰性が判明した後は、発症者に接触した日を day0 として day14 までフルプリコーション。

・家族が新型コロナウイルス発症者の濃厚接触者になった場合

患者本人が家族以外の新型コロナウイルス発症者の濃厚接触者になった場合と同様とする。

・家族に発熱があるが患者本人は発熱がなく、家族が PCR 陰性だと判明した場合

フルプリコーション不要。

・法人外の訪問看護ステーション等への指導

患者本人あるいは家族に新型コロナウイルス感染の疑いがある場合、または濃厚接触者となった場合、または PCR 陽性だが自宅待機中の場合、サージカルマスクとゴーグルまたはフェイスシールドを装着し接触後の手指衛生を徹底すれば、自宅で患者のケアをしてよい。ただし、気管切開患者、気管切開なしでも吸引や吸入が必要な患者、バイパップやネーザルハイフローなど人工呼吸器を使用している患者のケアをする場合は N-95 マスクが必須である。

(参考)

新型コロナウイルス感染症 COVID-19 診療の手引き（厚生労働省新型コロナウイルス感染症対策推進本部 2020 年 7 月）

6 退院基準・解除基準

1. 有症状者の場合

- ① 発症日（症状が出始めた日、発症日が明らかではない場合には陽性確定に係る検体採取日）から10日間経過し、かつ、症状軽快（解熱剤を使用せずに解熱しており、呼吸器症状が改善傾向である場合をいう）後72時間経過した場合、退院可能とする。
- ② 症状軽快後24時間経過した後、PCR検査または抗原定量検査で24時間以上間隔をあげ、2回の陽性を確認できれば、退院可能とする。

2. 無症状病原体保有者の場合

- ① 検体採取日から10日間経過した場合、退院可能とする。
- ② 検体採取日から6日間経過後、PCR検査または抗原定量検査で24時間以上間隔をあげ、2回の陰性を確認できれば、退院可能とする。

* 上記の1,2において、10日以上感染性を維持している可能性がある患者（重症免疫不全患者など）では、地域の感染症科医との相談も考慮する。

③ スタッフが新型コロナウイルス検査で陽性になった場合の対応

- ・当法人の職員が PCR 検査もしくは抗原検査で陽性になった場合。直ちに理事長に報告する。理事長は、保健所に報告し、その指示を仰ぐ。同時に、ただちに理事会の下に緊急対策会議を組織し、陽性になった職員と勤務時間に接触した職員、患者を明らかにし、法人としての対応を検討し、事業所閉鎖に備えた対応を行う。本人は、自宅待機。
- ・発症したスタッフが勤務する事業所はスタッフの感染者接触状況による本マニュアルの対応規定に基づき、勤務制限 保健所と相談しその指示があれば PCR 検査を行う。陽性者は自宅待機し、保健所に報告する。
- ・発症したスタッフが勤務する事業所を閉鎖するかどうかは保健所の指示に従う。クラスターになっていなければ業務継続もあり得る。その場合は、発症者の動線を明らかにして保健所と相談のうえ消毒を実施する。

④ 在宅患者が COVID19 を発症した場合

- ・症状があり、当法人の医師の指示、あるいは実施で PCR 検査を行った場合は、理事長に直ちに報告し、本マニュアルのスタッフの感染者接触状況による対応規定に基づき対応する。同時に保健所に報告し、その指示に従う。
- ・患者が無症候性保菌者で、家族の症状も軽症で、強く在宅療養を希望された場合、受け入れ先の医療機関が見つからない場合は、各事業所の責任者医師と相談し、保健所にも報告したうえで在宅診療を継続する。
- ・その場合は、事務局と相談し、ガウン、マスク、手袋などを他事業所の訪問看護師や訪問介護のスタッフにも供給することも検討する。

V. 新型コロナウイルスの安定性

- 温度 4°Cで14日間安定 22度では7日後ウイルス検出 37度では2日で検出されなかった
70度では5分で失活
- 22度 湿度60%で物の表面に付着したウイルスの活性の持続
印刷物、ティッシュペーパーは3時間で検出されなくなる
加工木材と布地は2日間
ガラス、紙幣 4日間
ステンレスとプラスチック 7日間
サージカルマスク 表面7日後にもウイルス検出 内側 7日後に検出されず
- 消毒薬は次亜塩素酸ナトリウム、70%以上のアルコールなどほとんど有効
(The Lancet Microbe 2/4/2020 Stability of SARS-CoV-2 in different environmental conditions)
- 日本で固有に発売されている次亜塩素酸水（次亜塩素酸ナトリウムとは別物、塩酸や NaCl を電気分解して作成、光で失活する）も国内の実験で有効性が確認されている。